



Title	日本中国語教科書の形式および内容変遷による啓示 (二) : 拼音採用以前の中国語音声表記法ほかの実態 概観
Author(s)	王, 周明
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 10- 19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91545
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本中国語教科書の形式および内容変遷による啓示（二）¹ —拼音採用以前の中国語音声表記法ほかの実態概観—

王 周明

1. はじめに

日本においては、江戸時代の唐話²学習から現代まで、広義の中国語コミュニケーション能力を養成するという目的を達成するため、中国語学習に関する教本³は様々な形式と内容で数多く世に出されており、その種類は二千を超えるとされている。

その中で、中国語音声表記法の面では、1958年10月に中国の時代出版社によって刊行された『汉语教科書 Modern Chinese reader』上下2冊⁴が境目となり、拼音(ピンイン)採用以前の次から次へと候補を試行する模索時期と拼音採用以降の統一／定着時期に分けることが出来る。後者の統一／定着時期において、ローマ字のアルファベットおよび一定の声調記号を用いて中国語の共通語の漢字の読み方を示す、拼音という音声表記法は1958年2月に中華人民共和国の漢語拼音法案⁵として制定・採択され、そこで中国発外国人学習者向けの中国語教科書に直ちに採用され、さらにそこから六十五年後の今日において、すでに世界中の外国人中国語学習者が中国語の発音を学習する際に必ず利用するとも言えるほど普及されてきた。一方、前者の模索時期の全ての段階において、中国語の音声を一般の日本人学習者により理解しやすく、または習得しやすくする方法についての試みは、教科書作成において重要な一環でありながら、解決困難な課題とされていた。編著者たちは、時代の要請に合わせて、中国語音声表記法についてさまざまな候補の試行を繰り返していた。

本稿では、江戸時代の唐話学習の背景は明治以降のものと根本的に異なるため、明治時代以降の日本において拼音採用以前に出版されたいくつかの中国語教科書に着目し、中国語音声表記法の各実態を概観する。また、当時の社会情勢や文化的要素と結びつけながら、言語学的な変遷から明らかになる日本人の中国語音声学習の試みを異文化理解の視点から再評価し、考察してみる。

1. 中国語音声表記法の新しい出発点となったウェード式表記法

¹ 本稿は科学研究費基盤研究B「異文化理解における外国語教科書の役割—中国語・ロシア語・朝鮮語を対象として—」（課題番号19H012820）による研究成果の一部である。

² 江戸時代の中国語に対する通称。

³ 中国語教本には、一般教科書の他、独習書や辞書なども含まれる。

⁴ この教科書は早くも日本に伝わっており、中の本文、例文および練習問題がもとのままにされておく以外、新出単語に日本語の訳語・説明文の中国語原文が残るまま段落ごとに日本語の訳文が付け加えられ、1960年11月に光生館によって日本語版『中国語教科書』上下2巻として刊行された。さらに、1969年に説明文の中国語原文を全部削除して上下2巻まとめて『合本 中国語教科書』一冊として再刊された。

⁵ 中国語原文：汉语拼音方案。1958年2月11日の第1期全国人民代表大会第5回会議で採択された。

世界初の北京語教科書——トーマス・ウェード『語言自邇集』(1867年初版、1886年第2版)の出版意義について、高田 2001: 132, 141-142 は下記のように述べている。

…諸外國における中國語學習の方向を決定づける役割を果たした。…日本でも翻刻や抄出本が出版され、明治期の中國語教育に大きな影響を與えている。…民國が成立してのち、國音の標準問題で、おなじ五聲體系を巡って喧喧諤諤たる議論が繰り広げられることになるが、實はそのころにはすでに北京語の勝利は國際的には決定されていたのである。言語そのものの變化と發展はもとより自律的なものであるが、社會の諸關係の中に占める言語の地位は、時代や各種條件によって位置づけられる。とりわけ近代においては廣い意味での外交、すわなち國際關係が決定的な力を發揮する。もちろん變化を人々が感得するには長い時間が必要であつて、中國における言語規範が南京から北京に移動するにも、明代以來數百年の時間がかかっている。ウェイドの『語言自邇集』の出現は、その規範變化の成立點に立っているのである。

(高田 2001 年より抜粋、下線部は筆者による)

『語言自邇集』には、19 ページにわたって発音編が収められており、そこで見られた中国語(正確には、標準語化される前の北京語)の音声表記法は一般的にウェード式と呼ばれている。この方法では、例えば「小 hsiao3」のように、各漢字の音声を[ローマ字の綴り+綴りの右上に声調(アラビア数字1~4で示される)]という形式で示される。さらに、音声表記上で有気音と無気音の区別を重視し、四声の調類名称およびその高低變化の違いについても重要な説明がなされており、これらは日本の中国語教科書に大きな影響を与えていた。ここで、張衛東 2012 による中国語訳文を挙げておく。

第一声是“上平”，或叫高平调。

第二声是“下平”，或叫低平调。

第三声是“上”，或叫升调。

第四声是“去”，叫降调或去声。

第一声称“高平”，足以表明，一个词不论发音快慢，它的音既不升高也不降低。我们的一位汉学家已正确地称之为“肯定”的声调。

第二声称“低平”，发音急拉上扬，很像说英语表示疑问或惊讶那样。

第三声称“升”，发音近乎急而陡，很像我们表示愤怒和否认的语气。

第四声称“降”，音被拖长，很像我们表示懊恼、遗憾的语气。

2. 『語言自邇集』の北京語声調認識の受容実態

明治期における中国語教育の最初の背景は、明治前期の日中両国の外交需要に応えるため、中国語の通訳養成が急務となったことにあった。この時期、日本政府は江戸時代の南京官話から北京官話へと中国語の言語規範の転換を図ろうとした。しかし、北京から来たネイティブ教師以外、東京外国語学校漢語学科の中国語教師を含め、日本国内で北京官話の音声を知る者が殆どおらず、また利用可能な教科書も存在しないという困難に直面した。

こうしている中で、『語言自邇集』初版の影響を受け、明治前期に『北京官話伊蘇普噲言』、『亜細亞言語集支那官話部』と『支那語独習書』が相次ぎに出版され、明治期の中国語教育にかなりの影響を与えていた。

2.1. 中田敬義[訳]『北京官話伊蘇普噲言』(1879年)の場合

渡部温に託された英文書を北京留学中の中田敬義が北京人の英紹古父子の助力を得て、翻訳書という形で明治12年(1879年)に東京で刊行された『北京官話伊蘇普噲言』は日本初の北京語教科書として、まさに上記の明治前期の社会情勢によってできたものである。そこで見られる音声表記に関する内容は本文の欄外に記され、その特徴は以下の通りにまとめることができる。

北京音に関する提示が58カ所となる中、49カ所が直音法(例えば: 鵠、音瓜／露、讀作漏など)で示され、1カ所は反切法({口餒}、音餓伊切)が用いられ、20カ所は調類名称(上平・下平・上聲・去聲)が用いられている。

堅固な漢文基礎の持ち主である中田敬義の音声表記には、中国古典に由来する伝統音韻学の直音法と反切法という表記法が用いられながらも、北京語の四声の提示に『語言自邇集』からの直接影響も覗える。更に興味深いのは、筆者が確認してみたところ、58カ所の北京音に関する提示はいずれも『語言自邇集』に触れられていないものである。『語言自邇集』と照り合わせながら、その遺漏を補うという意図を中田敬義の中にはあつたに違いないだろう。六角1999によると、北京留学中の中田敬義は『語言自邇集』と早々に出会った。しかし、説明などが英文で書かれたのもあり、斬新なウェード式表記法を短期間内に吸収しきれず、声調の部分しか参考できなかったのはむしろ想像が付きやすいことであろう。それ故、『北京官話伊蘇普噲言』は直ぐにそのまま中国語教育現場で使用可能な教科書にならず、実際に広く読まれた読本にとどまってしまったようである。

2.2. 廣部精[編]『亜細亞言語集支那官話部』(1879年)の場合

廣部精が『語言自邇集』の「散語」「問答」「談論」を底本として編輯した『亜細亞言語集支那官話部』に見る中国語音声表記の示し方の特徴は付録の図①で示される、巻頭の凡例の説明順によると、下記の通りになる。

各章の冒頭の一列に、主な漢字の音声について、先ず漢字の右側に「五音拗直五位圖」に基づく「國字」(＝カナ表記)を用いて縦書きで記され、そして漢字本体をめぐり左下から右下まで時計回り順の四角圏点法で四声が示される。有気音については、四声の圏点を黒塗りして示される。

こうした音声表記法は、有気音を表記する点がウェード式に通じる以外、江戸時代の岡山冠山による唐話教本類に見る表記法を受け継いでいるように見える。そこで、四声の四角圏点法と有気音の黒塗り法は日本における中国語音声表記法の中で不可欠な日本的要素として定着しており、長い間にわたって存続していた。

また、北京語の四声については、それぞれの高低変化を順に「平而安／平而輕／上而猛烈

／去而衰遠」⁶として感覚的で描写的言葉を用いて説明され、南方方言のような入声と濁音が存在しないことも強調される。但し、『語言自邇集』における四声の高低変化の説明には母語英語との対照が含まれ、より実感しやすくなるのに対して、『亜細亜言語集支那官話部』ではこのような対比的な説明が行われていない。

2.3. 宮島大八[編]『支那語独習書』(1900 年)の場合

『支那語独習書』における音声表記、カナ表記、そして四声の四角圏点法から有気音の黒塗りまで、これらはいずれも『亜細亜言語集支那官話部』の影響を受け継いでいるように思われる。一方、継承とは言え、『亜細亜言語集支那官話部』の「五音拗直五位圖」のような複雑な関係図有を避け、巻頭の凡例では、重音(有気音)/軽音(無気音)・廣音/窄音・捲舌音/舌尖音・開口音/合口音の両兩対立のように発音の概略的な説明がなされている。但し、本文の発音の部分では、個々の音の発音方法は一切記されていないため、六角恒廣による解題では、『支那語独習書』は独習に本当に向いているかとも疑問視されている。

また、四声の高低変化について説明が行われた際に、『亜細亜言語集支那官話部』に沿って感覚的で描写的言葉が用いられているが、それぞれ「響キノ差」として表現され、「平易二發シテ、些ノ低昂ナキ／聲尾昂リテ、人ノ物二驚キテ失聲セシ如キ／發音ノ猛烈ニシテ、長ク語尾ヲ引クモノ／語尾ノカヲナクシテ、人ノ嘆聲ヲ發スル如キ」と述べられている。『語言自邇集』ほどの対照がないが、高低昇降の特徴が失声や嘆声などの譬えによってより具体化され、より実感しやすくなり、そして四声の発音実践により利用されやすくなるだろう。

最後に本文構成に関する一点を挙げたい。15 頁の発音と 2 頁の四声が独立して、語句学習の部分に先立って発音基礎の部分構成している点は『語言自邇集』に類似しており、日本の中国語教科書における本文構成の突破と言えるだろう。

2.4. 受容実態のまとめ(一)

今後の中国における北京語の重要性が認識され、『語言自邇集』を追い越し、教科書の作者達は早々に教科書名に北京官話、支那官話または支那語といった名称を用いるようになった。『語言自邇集』が明治前期の中国語教科書に与えた影響は、主としてウェード式表記法ではなく、江戸時代における中国語の言語規範である南京官話と大きく異なる、それまでに知られていなかった北京語の声調に関する新たな情報にあった。

3. ウェード式表記法の受容および変容

[ローマ字の綴り+綴りの右上に声調(アラビア数字 1~4 で示される)] でできたウェード式表記法は、そのローマ字の綴りは一見すると複雑に見えるが、徐々に日本の中国語教科

⁶ 筆者訳：平坦で落ち着く／やや軽く上昇する／急激に上昇し強くなる／急速に下降し弱まる

書においても受け入れられるようになってきた。

3.1. 興亜会支那語学校[編]『新校語言自邇集 散語ノ部』(1880 年)の場合

『新校語言自邇集 散語ノ部』も早い時期に出版されたものだが、2.1. ～2.3. の3種と異なり、日本的要素が一切加わらず、『語言自邇集』の「散語」一章を抽出して僅かに原文の字句を書き換えてできた一冊である。そこで見られる中国語音声表記法の示し方の特徴は以下の通りである。

各章の冒頭の一行に、主な漢字の音声をもとのウェード式のまま〔ローマ字綴り＋綴りの右上に声調（アラビア数字 1～4 を用いる）〕で示される。

ウェード式表記法はこの形で初めて日本本土に導入されてきたが、それに伴って現れた問題は、このようなウェード式のコピーバージョンには『語言自邇集』の発音編のような解説が欠けていることである。つまり、ウェード式表記法の真髓が未だに理解されていない状態のままになると、暫くの間は中国語音声の習得にはあまり役立たないと想像される。

3.2. 瀬上恕治『日文對照官話問答新篇』(1907 年)の場合——和洋折衷の音声表記法

『日文對照官話問答新篇』における和洋折衷の中国語音声表記法は下記の通りである。

本文欄外に、冒頭に黒塗りの有無で無気音と有気音を区別する点が注記され、それから本文から抽出された各漢字の本体に四角圏点法で声調が示され、漢字の下側にウェード式のローマ字綴りとなる。

しかし、ウェード式のローマ字綴りには、「車」のように chē と表記されるべきところが che と間違えられ、「身」のように shēn と表記されるべきところが shen と誤植されるなど、ē が e に誤って使われる箇所が多く見受けられる。また、「神」のように shēn と表記されるべきところが shēng と誤植されるなど、-n と -ng の間違いも点在している。これらの誤りから判断すると、ウェード式のローマ字綴りにはあまり慣れ親しんでいないと思われる。

その他、本文の一部文字の傍らに | の符号が用いられ、対話語句中の「重念」または対話中の「調子／腔調／アクセント」が表されている。

3.3. 張源祥『支那語の會話』(1939 年)の場合——和洋の音声表記法の併用

李无未 2004 によると、辞書類に属している『日清字音鑑』(1895 年)⁷の本文には漢字字音の図表があり、漢字の左側にウェード式表記法、右側にカナ表記となっている。

『支那語の會話』における和洋の音声表記法を併用する状況は以下のようである。

本文の各漢字に四角圏点＋カナ表記で音声が表示される他、会話欄の下側に各文の音声が再びウェード式で表記される。

このように二重保険掛けの上、レコードにも録音されており、学習に非常に便利になっているだろう。

⁷ 伊沢修二・大矢透 1985 『日清字音鑑』、大日本図書株式会社。

3.4. 受容実態のまとめ (二)

ウェード式の完全なコピーバージョンから始まり、和洋折衷の音声表記法の採用、そして和洋の音声表記法の併用へと進化する過程は、受容プロセスにおける変容と言える。孫云偉 2021 の考察によると、宮島敏吉 1931『支那語四週間』⁸は注音符號（関連ものとしての声調符号）、ウェード式のローマ字表記、そして仮名表記を包括的に収録することにより、仮名表記の改善を達成した。この意味で、受容プロセスにおける変容はより正確に北京語の音声を表記するための工夫を凝らした結果の現れと言えよう。

4. 日本の中国語教科書における中国本土発の中国語音声表記法の受容

中国本土発の中国語音声表記法には、伝統音韻学の直音法や反切法があった。さらに、拼音以外でも、一定の期間において相当な影響力を持った表記法として、注音符號（声調符号を含む）、国語ローマ字、およびラテン化新文字が存在しているまたは存在した。

注音符號と国語ローマ字とも中華民国にて制定された中国語の音声記号である。注音符號は、その考え方が漢字の偏旁を簡略化してできた日本の仮名に由来している。最初に公式に発表されたのは 1918 年であり、当初は国音字母と呼ばれ、39 文字の異なる配列となっていた。しかし、国民革命後の 1930 年に注音符號と改名され、1932 年には北京音を基準にした新しい国音が定められ、文字数は 37 になった。四声の表記方法は、1922 年に旧式の四角標圈法が廃止され、声調符号（(一) ˊ ˋ ˊ ˋ）に変更され、注音符號の右側で表記されるようになった。

国語ローマ字は、1928 年にラテン文字によって制定されたもので、記号や数字を使用せず、綴りを変えることで声調を表せることが特徴である。

ラテン化新文字は、1929 年に文盲教育のために漢字の廃止を前提としてラテン文字によって作成されたもので、声調を表すための工夫は殆どされていないという特徴がある。

4.1. 藤木敦實・麻喜正吾『標準支那語會話教科書 上巻(基礎篇)』(1939 年)

当該教科書は、初版から僅か 2 年で 31 版までの成功した発行を達成した。その理由を本文構成上の特徴と音声表記上の特徴から考察してみたい。

本文構成上では、発音篇と会話基礎篇の 2 つの部分から成り立っている。発音篇では、学習内容が四声、韻符、結合韻符、声符の順序で提示されている。特に四声の高低昇降やおおよその調値に関しては、図②の五度標記法によって直感的な理解が容易になった。また、日本人にとって難しいとされる発音方法は図③のような図解によって視覚的に表現され、可視化されている。

音声表記上では、本文の会話文の下部には各漢字に対してウェード式表記法と注音符號

⁸ 宮島敏吉 1931『支那語四週間』、大学書林。

(声調標記なし) が使用されている。

これらの特徴により、本教科書は多くの支持を得られたようである。

4.2. 倉石武四郎による発音教育への連続的挑戦

4.2.2. 『支那語發音篇』(1938 年)と『支那語發音入門』(1942 年) ——言語学的解説・言語教育の理論と実践の視点から注音符號・国語ローマ字を採用

『支那語發音篇』は当時すでに常識になっていたウェード式に否定的な態度が示され、別売のレコードより発音が聞かせられ、注音符號の導入に全力が注がれた。実用性の他、言語学的性格も強い。9 頁にもわたった凡例の前半だけでも、『説文解字』に基づいて各符號の漢字由来(文字学)、標準音の四声の標記方法および旧四声との関係(音韻学、四声の名称改正:(旧)上平/下平→陰平/陽平)、音節表の音理(音韻学と音声学)について非常に詳しい説明がなされている。

本文のほうは【字+語彙】の発音内容からなるが、倉石は国語ローマ字を用いて体系的に韻符→声符→音節の順で逐語的に全ての発音の音理をも説明している。

『支那語發音入門』になってくると、言語学的な性格が消え、言語教育が主体になっている。大いなる特徴の一つは国語ローマ字が使用されず、基本的な発音方法が図④のように【写真+図解】の提示によって可視化されている。

また、前述の二種に加え、1940 年に弘文堂から出版された『倉石中国語教本 卷一』も注音符號を使用しているが、言語学的な性格や可視化された発音方法の面では特に何にもないため、本考察の対象から除外された。

4.2.3. 『ラテン化新文字による中国語初級教本』(1953 年) ——ラテン化新文字への先駆的な試作

音声表記上の特徴と言にくいかもしれないが、耳と口の訓練に重点を置く場合、脱漢字が効果的だと倉石は考えている。そのため、ラテン化新文字の本文は別売の「中国語模範會話」レコードに吹き込まれ、実験音声学の手法を用いて機械による吹き込みの音波の測定が行われ、そこで得られた図表は教科書に収録された。(附録に漢字と注音符號によるテキストが収録)

4.2.4. 『PINYIN ZHONGGUO-YU yufa ローマ字中国語語法』(1969 年) ——耳と口との訓練に重点を置きつつ、脱漢字の続編

倉石による当該教科書の位置付けは、中国語を話せるようになるための一種の練習帳として捉えられる。本来ならば、練習問題においての「次の文を中国語で書きなさい」というべきところが、「次の文を中国語でいいなさい」となっており、引き続き重点が耳と口の訓練に置かれ、口頭作文が要求されている。

5. おわりに

社会情勢の面では、中国語の教育機構は明治初期に外務省所属の漢語稽古所から漢語学所へと改名され、その2年後には文部省の管轄下にある外国語学所へと移管された。さらに、すぐに東京外国語学校と統合され、4年後には東京商業学校に吸収合併されて第三部となった。そして、その11年後には語学部と改称したが、僅か1ヶ月後には語学部が廃止され、生徒は商業学校へと移籍するという事態が発生した。

こうした変遷の連続する学校事情から、中国語は外国語としての英語、フランス語、ドイツ語に比べて地位が低く、不安定なものとなっていることが覗え、また専門的教育人材の確保も困難な状況が見受けられる。その後、多くの中国語教科書は専門的な知識を有する者によって作成されるのではなく、一般の民間人によって作成される傾向が強くなり、また、一時的に速成教材が流行していたことも当時の社会情勢と深く関係していると言えるだろう。

一方、『ラテン化新文字による中国語初級教本』のはしがきに、下記のことが書き記されている。

日本人は漢字の日本的常識を応用して中国の漢字文を読んだつもりになりがちであるが、これが日本人全体として中国語を軽く考え、自然、中国語の学習意識を低下させた大きな原因である。

文化と言語的側面においては、長年にわたって漢文学習を行ってきた日本人にとっては、仮名表記が不可欠な要素となっている。このため、伝統的な観念——「仮名表記依存症」に縛られながらも、中国語の音声学習に取り組むと、その音声の本質的な側面に辿り着くことが困難であろう。明治時代から昭和中期までの間、中国語の音声表記におけるカナ表記の改善が数多くの中国語教科書で試みられたが、その成果は極めて限定的なものだった。

荒木氏 1981 による厳しい批判を受けた「日本語的支那語」は、まさに上記の内外の要因によって形成されたものである。

そのため、倉石武四郎の言葉「母国語習得の場合と同じく、すでにある国語の音声を知っている人に、それぞれの音声に対応する文字を教えるのが自然の順序である」という指摘が適切である。彼の中国語学者としての連続的な挑戦(4.2 節参照)は、中国語の主体性が中国の人々に存在することを冷静に認識しながら行われた試みと言えるのである。

【検討対象とした中国語教科書（刊行順）】

中田敬義[訳]1879『北京官話伊蘇普噲言』、六角恒廣[編]『中国語教本類集成第一集第一巻』、不二出版

廣部精[編]1879『亜細亜言語集支那官話部』(1892 年再版)、六角恒廣[編]『中国語教本類集成第一集第一巻』、不二出版

興亜会支那語学校[編]1880『新校語言自邇集 散語ノ部』、六角恒廣[編]『中国語教本類集成第一集第一巻』、不二出版

宮島大八[編]1900『支那語独習書』、六角恒廣[編]『中国語教本類集成第一集第二巻』、不二

出版

- 瀬上恕治 1907 『日文對照官話問答新篇』、(東京)東亜公司
- 倉石武四郎 1938 『支那語發音篇』、弘文堂書房
- 藤木敦實・麻喜正吾 1939 『標準支那語會話教科書 上卷(基礎篇)』、光生館
- 張源祥 1939 『支那語の會話』、(神戸)東方学藝社
- 倉石武四郎 1942 『支那語發音入門』、弘文堂書房
- 倉石武四郎 1953 『ラテン化新文字による中国語初級教本』、岩波書店
- 倉石武四郎 1969 『PINYIN ZHONGGUO-YU yufa ローマ字中国語語法』、岩波書店
- 北京大学外国留学生中国語文專修班・光生館編集部[編](1960) 『中国語教科書(日本語版漢語教科書縮刷版) 上・下巻』、光生館、上巻:1962 年第 5 刷+下巻:1961 年第 4 刷
- 北京語言学院・香坂順一[編]1969 『合本 中国語教科書(日本語版漢語教科書縮刷版)』、光生館、1987 年第 17 刷

【参考文献】

日文文献

- 荒木修(1981)「中国語発音学序説」、『茨城大学人文学部紀要(人文学論集)』第 14 号:pp. 1-17
- 王周明(2022)「中国語教科書に見る「中国語」および「中国」—1950 年代後半~80 年代前半中国原編日本改編のものを中心に」、『時空と認知の言語学 XI(大阪大学大学院言語文化研究科・言語文化共同研究プロジェクト 2021)』: pp. 1-10
- 倉石武四郎(1941)『支那語教育の理論と實際』、岩波書店
- 倉石武四郎(1973)『中国語五十年』、岩波書店
- 孫云偉(2021)「昭和初・中期北京語語音における仮名表記の改善—『支那語四週間』を中心に—」、『中国言語文化学研究』第 10 号: pp. 73-81
- 高田時雄(2001)「トマス・ウェイドと北京語の勝利」、『西洋近代文明と中華世界—京都大学人文科学研究所 70 周年記念シンポジウム論集』: pp. 127-142
- 李无未(2004)「清末期の日本人学者による北京官話の声調認識—四種類の、日本人学者編集の中国語の辞書と教科書を手がかりに—」、『日本文藝研究』第 56 巻第 2 号: pp. 1-19
- 六角恒廣(1999)『漢語師家伝』、東方書店

中文文献

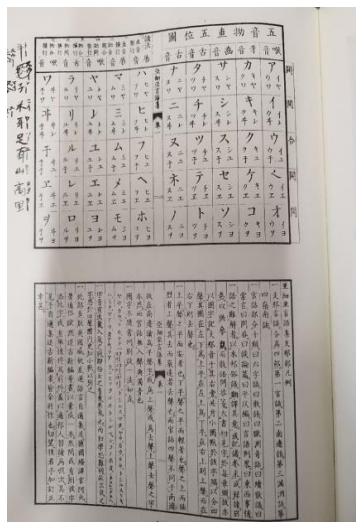
- 王周明(2021)「《北京官話伊蘇普喻言》的口語性相關問題試探」、『言語文化研究』第 47 号: pp. 25-43
- 王周明(2022)「日本漢語教科書形式與内容變遷的啓示(一)——以其江戸明治時期漢文背景的變化為中心」、『言語文化研究』第 48 号: pp. 21-37
- 威妥瑪[著](1886) 張衛東[譯]『語言自邇集(第二版)』、北京大學出版社(2012)

中田敬義[譯](1879)《北京官話伊蘇普喻言》、六角恒広[編]『中国語教本類集成第一集第一卷』、不二出版：pp. 171-216

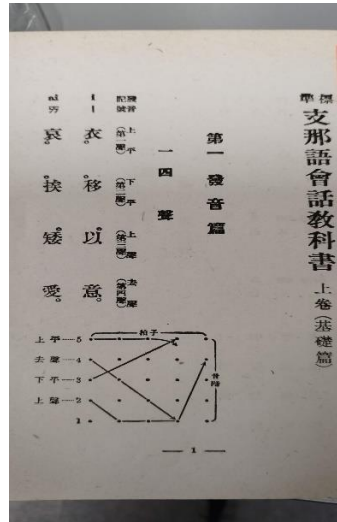
張西平[主編](2019)《漢語作為第二語言教學史研究》、商務印書館

【付録】

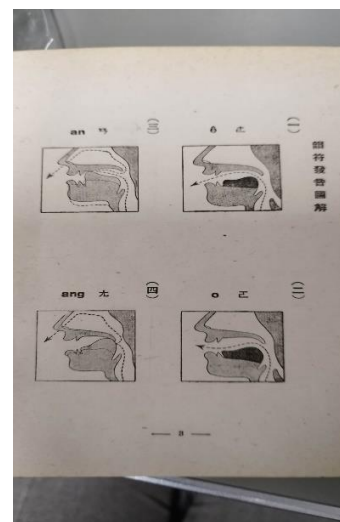
図①



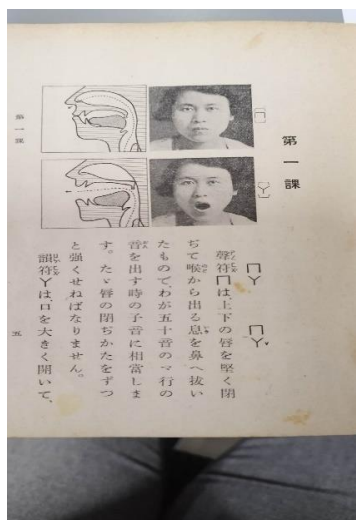
図②



図③



図④



図⑤

